特集

炎症性腸疾患(IBD)専門外来紹介

内科　八木　専

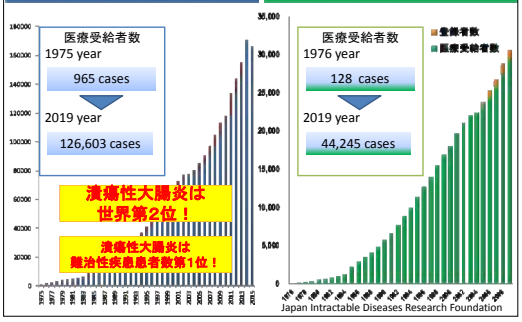
炎症性腸疾患（IBD）は持続的あるいは良くなったり悪くなったりを繰り返す腸の病気で、消化器内科で扱う病気のなかでは非常に対応が難しいものの一つです（図１）。主に潰瘍性大腸炎とクローン病を示す総称であり、済生会松山病院ではその専門的な診断・治療を行う『IBD専門外来』を立ち上げました。

図1　炎症性腸疾患　病態

潰瘍性大腸炎は大腸の粘膜に炎症が起こり、びらんや潰瘍ができる病気で、下痢、血便、腹痛などの症状があらわれます。クローン病は小腸や大腸の粘膜に炎症が起こり、下痢や腹痛が主な症状ですが、体重減少や肛門の異常をともなうことも多いのが特徴です。

IBD患者数は年々増加し、潰瘍性大腸炎の特定医療費受給者は12万人以上(人口10万あたり100人程度)、クローン病の特定医療費受給者数は約４万人(人口10万人あたり27人程度)と考えられています（図２）。四国内では愛媛県が一番多く、やはり増加傾向にあります。また、10歳代後半から30歳代前半といった比較的若年に発症するのが特徴です。

図2　炎症性腸疾患　患者数推移(2019年度)



IBDは、感染性腸炎など他の炎症性疾患との鑑別が重要とされています。まずは病歴聴取と身体診察による特徴的な所見から可能性を疑い、内視鏡検査をはじめとした画像診断によって確定します（図３、４）。

図3　潰瘍性大腸炎-内視鏡検査-

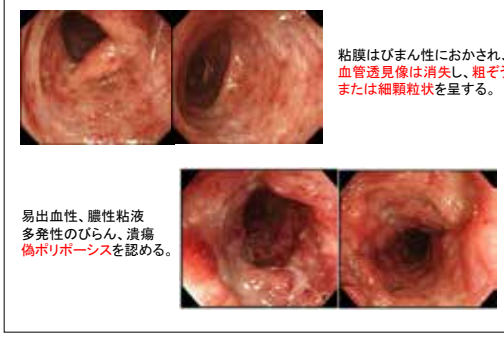
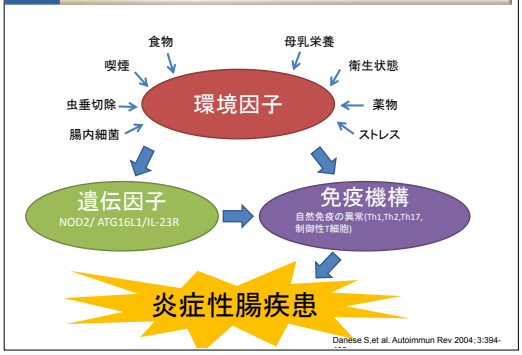


図4　クローン病-内視鏡所見-

IBDは厚生労働省の特定疾患（難病）に指定され、現在も研究が続けられています。原因不明の疾患のため、完全に治る治療法は確立されていません（図５）が、ここ数年の治療薬の進歩により、炎症をコントロールすることは可能となってきました。一人一人の病状にあわせて薬を選択し、日常生活に問題を感じることなく過ごしていただけています。

図5　炎症性腸疾患　原因



愛媛県下でIBD専門外来を開設しているのは、愛媛大学医学部附属病院、愛媛県立中央病院、松山赤十字病院と済生会松山病院の４施設のみとなります（2021年５月現在）。現在、当院では２名の医師でIBD専門外来診療を行っています。２名ともに炎症性腸疾患学会に属しており、大学病院在籍時にもIBDの診療、研究を中心に担ってきた経歴があります。現在までの知識、経験をもとに患者さんの病状のみでなく日常生活を送るうえで最適な治療法を選択するよう努めております。IBDの症状でお困りの際には、当院IBD専門外来にご相談ください。